

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

FERRARI GONÇALVES Felipe

論 文 題 目

The topology of 'true nothingness': A genealogy of Kitarō Nishida's *basho*'

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	宮原 勇
委員	名古屋大学	教授	田村 均
委員	名古屋大学	教授	金山 弥平
委員	名古屋大学	准教授	安川 晴基

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

第一章<序>では、西田の論文「内部知覚について」(1924)と「表現作用」(1925)における「場所」の定義を検討した。そして、第二章<「場所」の意味論>では、「場所」というのは、「力」または「エネルギー」をもつ「所」という意味をもち、Feld(場)をもつ「所」であるとしている。

そして、第三章<プラトンにおける「コーラー」>では、プラトンの空間(χώρα)概念を検討した。それによると、コーラーとは、その内に有るものにとって、受容者(δεχόμενον)であり、感覚的存在者(質料的存在)でもなく、英知的存在者(イデア的存在)でもない、「第三の類」であるとした。

第四章<アリストテレスにおける「トポス」>では、アリストテレスの『自然学』で説明されている「場所」の概念を分析した。それによると、「場所」とは、(a)ものの形相(εἶδος)でもなく、(b)ものの質料(ύλη)でもなく、(c)包むものと包まれるものの両方の最端の面と面との隔たりでもないとし、結局は、(d)最端の面そのものであり、その内に物体を直接に含む面の結合体であるとしたという。

第五章<ベルクソンと「等質的環境」>では、ベルクソンの空間概念を検討した。ベルクソンによると、意識は空間において、ものを考えるという。あるいは、意識がものを考えることができるようになるためには、それらを空間に置かねばならないと考えた。つまり、意識にとって、空間というものは我々を囲む感覚のアプリオリな基礎であるという。そのような空間には属性が全くなく、全くの等質的環境であるというベルクソンの説を検討した。

そして、第六章<アインシュタインにおける「力の場」と「相対性理論」>において、アインシュタインの相対論的空間論を分析した。というのも、西田幾多郎は当時話題となったアインシュタインの「場」という概念に影響されたからである。相対性理論によると、「場」(Feld)というのは、「重力場」として、全ての物体がそこにおいて、他の物体に作用(例えば、運動、変化など)を及ぼす力の結合体そのものである。そして、第七章<西田における「場所」の概念>では、西田の「場所」の概念を検討した。西田も、有るものは必然的に何らかの場所に於いてあるという。もし、場所がなくては、我々は何が存在するかをも理解できず、存在するものと存在しないものを区別することもできなくなるという。そのような意味での「場所」、ないしは空間は、物理的空間ではなく、物理的空間でさえ、そこに「於いてある場所」が存在する故に認識できるのである。そのような意識の場所は、主観や客観、情意や全ての意識現象がそこに「於いてある」場であり、最も深い意味での意識の場である。それはそれぞれの主観に相対的なものではなく、全てのものの絶対的な場所であり、その意味では、真の無の場所であるという。第八章<「場所」の構造>では、西田の「場所」がどのような構造を為しているか検討されている。ものは確かに「意識の場」の内に存在しているわけではないが、全ての現象が「意識の場」の内に映されることにより物事の関係が認識され、自己によって経験される。そして、そのように、<現象を観察し、世界内で作用する「自己」は、それ自身変化する>のである。自己とは、そのような「存在者」であるため、「絶対無」ではないのは確かである。とはいえ、もしその「自己」が主観と客観の区別を突破し、宇宙を何らかの「統一」として認識しようとしても、「自己」とその「統一」の内に存在する諸現象の間に「知る」という関係があるという。一種の主観-客観関係である。それゆえ、主観と客観の二元性に関わる認識論的な問題は西田における「場所論」の出発点となっている。『場所』において西田は、全ての存在者とは、存在する限り、<於いてある>「場所」に存在しなければならないと述べている。

そして、「結び」において、筆者は、西田における「場所」は、プラトンにおけるχώραの様々な特徴を持っているとともに、アリストテレスのτόποςと似ている点もあるという。結局、西田の考えでは、全ての運動し、変化し、生成し、消滅するものは、意識の「不変的な場」に於いてそのような現象が生じているという。ベルクソンにとってと同じように、西田にとっても、意識は、ものの存在

論文審査の結果の要旨

に大切な役割を果たすが、前者によると、それは精神的作用を通じて空間性が生ずるが、後者によると、意識そのものが、ものがそこに於いてある場所なのである。また、相対性理論における「重力場」と西田哲学における「場所」との間には、次のような類似点があると指摘された。すなわち、第一に、「場」自体にそれぞれ力の強さの区別があるという点と、第二に、事物相互の関係がそこに於いて生起するという点。第三に、その場の内に存在し得るもの、つまりそこに於いて知られ得るものは、潜在的に無限であるという共通点があることが指摘された。

【本論文の評価】

本論文は、西田哲学の中心的概念となった「場所」概念の成立を、プラトン、アリストテレス、ベルクソン、アインシュタインの思想の影響の内に探った比較思想的研究である。そして、そのような「場所」をめぐる系譜学的考察を踏まえ、「場所」という概念が西田哲学の体系においてどのような役割を果たしているかが解明され、「働く自己」と「見る自己」との関係や、諸事物からなる実在世界とそれを映す「無の場所」としての意識の「場」といった諸要素間の関係を明解な図によって提示している。

本論文の特色としては、(1)まず執筆者自身が長年取り組んでいるプラトン、アリストテレス哲学でのコーラーやトポスに、西田哲学の「場所」概念の淵源を見ている点である。そして、(2)「現象の形式」という、われわれの認識を可能にするアプリア前提として「空間」を捉えるカント哲学の枠組みを、感覚的媒体としての「等質的環境」というベルクソン哲学の空間概念の内に見て取り、そのような空間概念がベルクソンを経由して、西田哲学の内に導入されたとする。筆者は、西田の「自然現象」という表現の内にカント、ベルクソンと続く(カントが『純粹理性批判』で述べた)「超越論的観念性」の立場での空間論の系譜を見て取ると同時に、アリストテレス、アインシュタインと続く実在論的空間概念の系譜も、西田哲学の内に見て取るが、その点は、本論文の特色となっており、高く評価してよいだろう。(3)上記二つの視点は実在論的視点と観念論的視点という、本来は互いに相容れない要素なのだが、筆者は「見る者」、ないしは「観察する自己」を中心としたパースペクティブを備えた世界構造を描いてみせることにより、二つの視点の統合を組織的に提示することに成功しており、この点も高く評価してよいだろう。

具体的議論としては、次のようになっている。「場所」、ないしは「空間」概念の、この二層性を筆者は、西田哲学の二つの自我概念、すなわち「働く者(自己)」と「見る者(自己)」の二層性に対応させ、前者、つまり世界内の現実的事物と関わり合う「働く者」としての自己は、現実的な対象世界の内部に客観化されて位置づけられているのに対し、後者の自己は、あくまでも「場」の中には登場しない、見えざる自己として自覚されるとする。実は、そのような「見る自己」の意識こそが、自分以外の存在者を映し、その意味ではなく全くの「無」としての絶対的存在者>であると言う。

以上の特徴が見られるが、特に本論文の特色となっているのは、西田幾多郎へのアインシュタインの影響である。西田が影響を受けた同時代人ベルクソンも1922年に『持続と同時性』においてアインシュタインにおける<時間の空間化>について論じており、哲学史的にも本論文の視点は十分に妥当性を有するものであると評価できる。

とはいえ、西田自身も「場所」論において言及しているスピノザなどは本論文に於いては一切、取り上げられていない点は問題点として指摘しうるが、執筆者本人は修士論文に於いて十分に論じており、本論文に於いては敢えてスピノザを取り上げなかったという。ただ、本論文内で何らかの形で言及する必要があったと思われる。しかし、この点は論文全体の価値を損なう程の瑕疵ではないと判断される。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士(文学)の学位を与えるのにふさわしいものと判断した。